月下の剣法者

伊藤桂一

新潮社

月下の剣法者

伊藤桂一

新潮社

月下の剣法者

著者　伊藤桂一

発行　一九九四年一月一五日

発行者　佐藤亮一　¥1,500-

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地
株式会社　新潮社
電話　営業〇三(3266)五一一一　編集〇三(3266)五四一一
振替　東京四―八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社　製本所　大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Keiichi Itô 1994, Printed in Japan

ISBN4-10-301808-9　C0093

目
次

見世物剣法　7
八咫烏の巫女　25
漂泊者の剣　45
旅路の剣法者　63
助太刀の秘剣　81
河畔の鶯　101
湯靄の中　121
魚刺し剣法　137

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〝岩燕〟飛ぶ　159
月下の剣法者　177
＊
参宮みちの仇討　197
山犬剣法　217
礫撃ち　235
河原の剣法者　255

装幀・蓬田やすひろ

月下の剣法者

見世物剣法

戦国の世から江戸初期にかけては、なお殺伐の気風が漂ったが、それだけに剣法者もまた多かった。剣法の創始伝承の時代が、花開きながら、加えて、大名の滅亡離散による、浪人の氾濫をみていたからである。主家のためにいのちを鴻毛よりも軽しと断じた思想は、それを、剣のために、と、置きかえることになった。強者のみが、生き残り得るのである。

――寛永のはじめのころ。

中山道は高崎の宿場の入口、街道脇の地蔵堂の板壁に、つぎのような貼紙がしてあった。

告

賭金付他流仕合

天下第一等東軍流　戸ヶ崎鉄之助

左記要旨ニテ他流仕合申受ケ候ニ付、心アル武芸者ハ申込マレ度

一、十月十日朝　辰ノ刻　正岳寺裏広場

一、立合料一件金一両　当方敗者タル場合ハ金十両ヲ呈ス

一、木刀、真剣、望ミニ応ズ　当方死ストモ賭金ハ進呈　但シ対者死シタル場合ノ埋葬料ハ自弁ノコト

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

立合人　戸ヶ崎門弟
宮之原武一郎

ここは、旅人の往来が多いから、右の貼紙に眼をとめる人も多いはずである。もともと上野国は剣客の多い土地である。上泉伊勢守の神陰流、川崎鑰之助の東軍流、石田伊豆守の無明流など、みな上州につながる剣の創始者である。東軍流戸ヶ崎鉄之助が、どのような来歴を持つのかはわからないが、貼紙をみた限りでは、よほどの剣客と思われた。もちろん、このような他流仕合は、路銀稼ぎのためであるが、土地の人々にとっては、なによりのみものとなるし、噂はたかまった。

貼紙の告示は、実施の日までに十日を置き、十月十日の早朝、告示通りに仕合が行われることになった。

その当日、正岳寺裏の広場は、近在の人々までもふくめて、黒山の人だかりとなった。見物客に迷惑のかからぬよう、宿場の世話人が縄を張って、仕合場所に立ち入らぬようにしてある。

戸ヶ崎鉄之助は、茶店から運び込んだ床几に、軽装の旅支度で粛然と腰を下ろしている。四十歳ほどか。総髪にしていかにも名のある剣法者らしい、色黒の引き緊まった表情である。骨格もまた逞しい。他を威圧する炯々たる眼光を持っている。

時刻になると、片隅の、石に腰を下ろしていた、これも旅装束の武芸者が立って、観衆に向けて一礼して、こういった。

「ただいまより、予告通りに他流仕合を行います。拙者、戸ヶ崎先生門下にて宮之原と申します。仕合の立合人を相務めます。お知らせの如く仕合料は申込者が金一両、勝たれた場合は金十両を呈します。勝敗の判定は拙者が行いますが、見物の皆様方の納得のゆきますよう、あきらかに打

ち込まれた一方を敗者といたします。もし、仕合申込者のなき場合は、戸ヶ崎先生の剣法を少々ご披露申し上げて、責めを果たしたく存じます。では、どなたか、仕合申込みの武芸者はおられませぬか」

宮之原は、そこで、一同を見わたす。観衆は、シンとなる。その、しずまった観衆の一方から、これも四十ばかりの、背の高い武芸者が出てきた。その武芸者は、宮之原に近づくと挨拶をする。宮之原は武芸者に「お支度を」といいおいて、戸ヶ崎のところへ行って、ひとことふたこと話し、戸ヶ崎がうなずくと、今度は観衆に向けて、こういった。

「ただいま、第一の申込者を受けつけました。一刀流、木坂綱之助殿です。諸国武者修行中、修業の一端と思うて、申し込まれた由です。木刀をもって戦われます」

身の上の、くわしいことは、敗けた場合を考えて、話さないらしい。人物、経歴はどのようでもよいのである。要は、勝つか敗けるかである。

支度を終えた両者は、向き合うと、互いに一礼して剣を構える。相青眼で、間合いをつめたが、ともに動かない。賭金はともかく、戦えば勝ちを制したいのが武芸者の真情である。互いに、相手の秘策を、向きあって構えた形の気息の中で、読みとらなければならない。つまりは、激しい剣気のたかまりの持続のなかで、どちらか一方が、気のゆるみをみせた隙を衝かれれば、それが敗けにつながるのである。

両者は、相青眼のまま、刻が過ぎても、一向に動かない。両者の息づまる剣気だけは、観衆にも伝わるので、まったく動かない両者をみつめながらも、観衆は寂として声がない。観衆もまた息づまる思いでみまもる。

四半刻を、かなり過ぎた刻。

木坂綱之助の五体が、低い呻きに似た掛声とともに、一瞬宙を飛んだ、とみえたが、つぎの刹

那には、どう、と地にのめり込むようにして、倒れていた。木坂は戸ヶ崎の小手を打って、剣を無用にさせる勢いで斬り込んだが、それより早く、戸ヶ崎の剣が、木坂の眉間を打ったのだ。

両者ともに、まさに、眼にもとまらぬ早業で、観衆は、勝負のついたあとも、声もない。気を呑まれてしまっている。

宮之原は、倒れた木坂のそばへ寄って行き、傷の様子を調べ、その身体を引きずって一方へ寄せると、木坂が脱ぎすてた羽織をその身体に掛けてやり、観衆に向かい、

「木坂綱之助殿、敗れて、ただいま絶命されました。戸ヶ崎先生の勝ちと認めます」

といって、一礼し、さらに戸ヶ崎に一礼すると、戸ヶ崎は観衆に向いて一礼し、席にもどる。

宮之原は、観衆に向けて、こういった。

「物の本に、慶長のはじめのころ、馬庭念流樋口定次と、村上天流とが当地烏川原で戦い、天流が斬り込み、逆に脳天を砕かれて死んでおります。ただいまの勝負、その時の模様を思わせる、みごとな勝負とみました。敗者木坂殿もまた、当地にその名を残さるべき、みごとな剣法者と心得ます」

そうして、また一礼し、

「つづいて、仕合にお申込みの方がいられますならば」

といって、一同を見渡している。

一撃に対者が息の根をとめられたいまの仕合ぶりをみて、恐れをなして申込者がいないのではないかと思われたが、つづいて、長身の武芸者が、群衆をわけて、仕合の場へ出てきている。

年はまだ、三十前であろう。若者の凜々しさが表情に残っている。これも同じく、宮之原に申し入れて、立合料一両を渡している。

話し合いがすむと、宮之原は戸ヶ崎に報告したあと、観衆に向けてこういった。
「第二の申込者は、陸奥の方ですが、流儀も名も秘めたいとの由です。よってかりに甲野乙平殿と申しあげます。木刀をもって戦われます」
前の時と同じに、両者は、はじめ、かなりの間合いをとって一礼し、歩み寄って、三間ほどの間合いをとるべく詰め寄ったが、この仕合は、ふしぎな仕合となった。
戸ヶ崎は、木坂とは、相青眼に構えて動かなかったが、甲野とは、しばらくは相青眼に構えあっていたものの、そのうち剣を右手だけに移して、右下段に下げ、そればかりか、くるりとうしろ向きになると、そのまま、甲野に向けて間合いをつめてゆく。つまり、一方はうしろ向きになって、うしろ向きのほうがつめ寄ってゆくのである。従って、残る一方は、相手のうしろから打ち込めばよい。
この無謀な戸ヶ崎の応対は、甲野を充分に驚かせたであろう。むろん、うしろをみせている相手には大きく隙があり（とみえてしまうのだが）どこからでも打ち込める。それだけに、（これでよいのか？　誘いではないか？）――という躊躇も微妙にある。
その躊躇を押し切って、甲野が、これも、低く叫んで戸ヶ崎の後頭部に向けて打ち込んだ時、つぎの刹那には、身をひるがえしたかとみるまに、宙にひらめいた戸ヶ崎の剣によって、
「戛ッ」
と、大気を裂くすさまじい、木刀と木刀とが打ち合って火花を発する音がして、甲野の剣は六、七間も中天高く飛び、同時に胴を払われた甲野は、地に伏したまま、もがいて、起き上がろうとするが、起き上がれない。
「宮之原、介抱せよ」
と、戸ヶ崎はそういい、また、もとの席にもどっている。

宮之原が、甲野を介抱して、片隅に運んでゆくまで、この時も、観衆は、声もなかった。
流派も名も明かさぬ甲野の不遜を、戸ヶ崎は怒って、奇矯の立ち合いをみせて、思い知らせたのかもしれない。
それとも、それが、宮之原がさきにいった、戸ヶ崎先生の剣技——の一つの披露であったのかもしれない。
考えてみれば、一方の技倆が格段に秀れていれば、横向きでもうしろ向きでも、強者が勝つのである。向き合うた時に、戸ヶ崎は、相手の技倆のほどをみぬいたのだ。
宮之原は、甲野の介抱を一応終えると、観衆に向けていった。
「甲野殿は、幸い、生命に別状はありませぬ。ただ、骨を痛めておられますので、ひと月ほどは旅ができますまい。甲野殿も、なかなかのご力量、打ち込みの気勢は中条流の流れを汲む〝箭の太刀〟とみましたが、無念、と答えられたのみです。——さて、つぎに、立ち合いお望みの方がおられますならば」
宮之原は、これもひとかどの武芸者なのだろうが、こういう見世物風の賭け仕合を何度もやっているためか、その口調が、おのずと、口上役のようになっている。

二者がたちまち打ち伏せられるようでは、とうてい勝目はないとみて、もはや申込者はおらぬのではないか、と思われた時、群衆の中から、みなりは武芸者だが、痩せて、細竹の杖を突いた男が、それも、どこかたどたどしい歩きぶりで、張縄を越えて、仕合の場へ這入ってきた。一見して、激しい戦いができるのか、と、疑いたくなるような風采である。とにかく、みすぼらしい。
「貴殿も、立ち合いを、お望みですか」
と宮之原は、ちょっとあやしんで、きく。

「はい。戦わせていただきたい。ただ、拙者、路銀にも窮し、お納めする一両がないのです。どうしても、納めねばなりませぬか」

武芸者は、奇妙な問いを発する。

「これは、しきたりでありますゆえ、いただかねばなりませぬ。その代り、当方も、敗れた場合は、十倍の金を払わねばなりませぬ故」

宮之原が、やや声を高めたのは、内輪な交渉のいきさつを、観衆にもきかせて、興を深めさせようと考えたからであろう。

「拙者は、村川市十郎と申し、生国は播磨です。剣はいささか神道流を学びましたが、貼札をみて、勝者には十両を給うとあり、その賭金に惹かれました。恥を申しますが、拙者は、敵を持つ身です。人を殺めて、脱藩して以来、すでに七年になります。長旅の無理もあって、かく少々身体も痛めおりますが、国に残せし妻子に、いささかなりと仕送りをしてやりたく存ずるのです。国の妻子は恐らくは、むざんな生きざまをさらしておるのではないかと思われます。と申して、敵に追われるこの身に、どのような、金銭を稼ぐすべがありましょうか。もしあるとすれば、賭け勝負に勝つことです。介添人の貴殿は、拙者の風体をみて、飛んで火に入るもの、と思われるかもしれませぬが、拙者、さきほどの木坂殿のごとく、討たれ申すとも本望です。敵とめぐり会うて討たれるよりも、すぐれた剣法者と戦うて討たれるならば本望、と存じたのです。よって、一両の立合料は所持せぬまま、ついまかり出て、かくはご相談を申しあげる次第です。ぜひとも、おききとどけ願えませぬか」

観衆の、声のきこえるあたりで、少々ざわめきが湧いたのは、村川の言葉が、興味と同情を呼んだからであろう。武芸者にしては、どこか頼りない身の上であり、人柄にもみえる。あれで戦って勝てるのか、と、心配させるが、勝たせたい気分が、観衆にはあるのだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com